熊日1957.12.25

ニュース・アンコール(3)

水俣の奇病

汚染経路はいぜんナゾ

掛け声ばかりの援護対策

豊庫を目の前に生活難

昭和二十八年ごろから水俣湾一帯の漁村に発生した「水俣の奇病」はことしになつて七人の疑似潜在患者が新しく発見され、患者総数六十一人、うち死亡者十七人に達した。しかし肝心の原因については「水俣湾内でとれる魚介類が媒体」ということが判つただけで、魚介類の汚染経路はいぜんナゾに包まれたまま、早くも三年目を迎えようとしている。

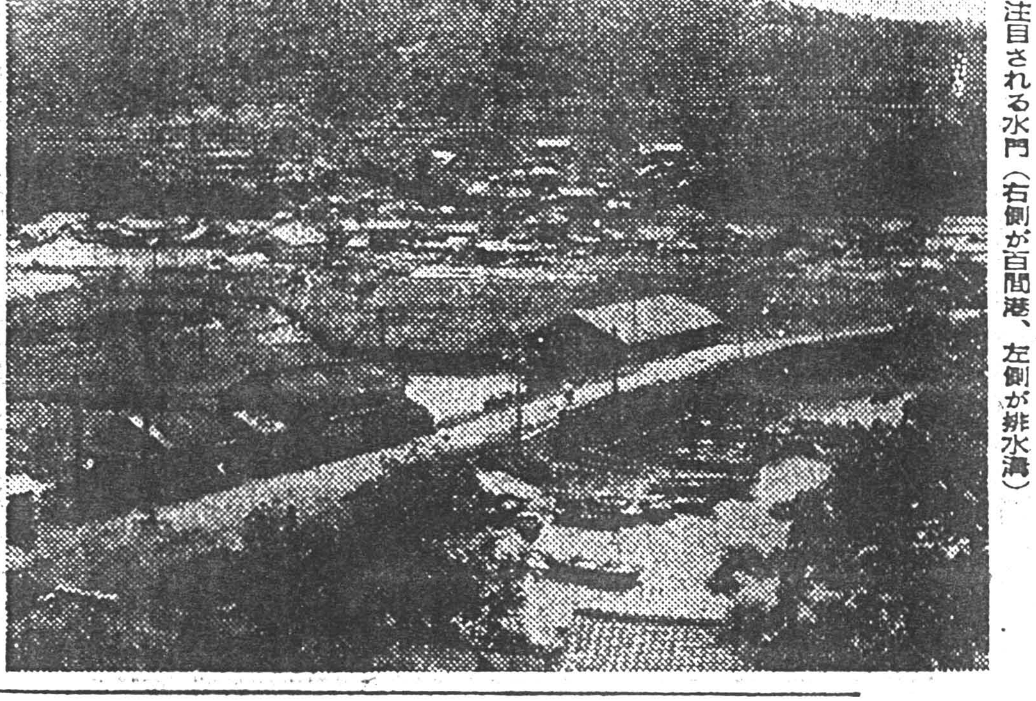
奇病発生地の水俣市袋、月ノ浦茂道の部落を訪れると、一応小康状態となり退院はしたものの言語機能や視力障害のため不具同様のり病者達の痛々しい姿が目につく。奇病の媒介体が、かつては城南第一の好漁場といわれた水俣湾内でとれる魚介類だとの発表いらい、同湾一帯の漁民達は魚の豊庫を目の前にしながら、深刻な生活難におちいつている。遠洋漁業への転換、農業への転換も真剣に考えられたが、援護対策は掛け声ばかり。生活保護を受けながら、日雇などをやつて細々と暮している実情である。

二年越しになる原因究明も医学陣を総動員しながら、あと一歩というところで決め手がなく、足踏み状態。一部には早くも迷宮入りの声をさえささやかれている。これについて田上県総評事務局長は「医学が政治でゆがめられたというウワサもある。県民が十分監視する必要がある」と強調しているが、医学陣は真向から否定している。

医学陣の一番新しい発表はさる十一月末、国立公衆衛生院で開かれた第一回研究発表会の折のものでⒶ発病者は湾内の魚介類を摂取していたⒷ湾内の一部泥土から多量のマンガン、セレンが検出されるⒸ発病したネコの症状は実験的にタリウム中毒症状に類似しているというもの。この結果、水俣の奇病は"ある種の化学毒物で汚染された魚介類を多量に食べたため起つた病気"であることがはつきりしたわけだが、問題の原因物質についてはマンガン説、セレン説、タリウム説があるうえ肝心の汚染経路についてもこの一球という決め球がないまま慎重なカン口令が布かれている始末だ。しびれを切らした現地漁民の間では医学陣への不信の声が高まつているが、病気の原因について熊大医学部のある教授は「実験的にはネコに新日窒水俣工場の泥を与えても奇病によく似た症状を示すが、完全に同じものだという決め手がない。工場側が発病当時の全資料を出してくれないかぎり迷宮入りの可能性もある。究明がおくれているのは研究費の不足だ」といつている。また他の某教授は「毒物による中毒だということがはつきりしたのだからもう奇病ではない。近いうちに結論がでる。おくれている原因はあまりにも研究者が多すぎて"船頭多くて船山へ登る"といつた状態になつているためではないか」という。

この点について第三者の四宮熊大工学部教授は「この種の原因究明はなかなか決め手がないし、困難なことだが、近いうちにはつきりするものと確信している。人道的な立場で雑音に惑わされず、あせつたり、けんかしたりしないよう仲良くやつて欲しい」と注文している。

いずれにしても十七人の尊い人命を奪つた「水俣の奇病」ははつきりした原因が判らぬまま、早くも三年目を迎えようとしている。この間、漁民達への救援の手もようやく差し伸べられようとしているが、生活の糧を奪われた漁民達を救うため、より広範な県民運動を盛り上げると同時に、一日も早く真因が究明されることが期待されている。



注目される水門(右側が百間港、左側が排水溝)

私はこう思う

全県民的な救援を

▽熊本短大教授内田守氏　水俣の奇病が毒物の影響であることはもう常識だ。毒物がどこから出たかということについては直接タッチしていないのでなんともいえない。熊大をはじめ医学研究機関が大きくとりあげたことは有難いことだと思うし必ず近い将来には解決されるものと確信している。全力をあげて一日も早く原因究明の日がくるよう努力して欲しい。医学が政治でゆがめられるようなことはあつてはならないし、またそんなことはないと思う。森永粉乳事件でさえ、最後には原因が判つたのだし、事件が事件だけに軽率には発表できないのだろう。患者達の救援についてはお役所まかせではなく、全県民的な救援運動にまでもつていく必要があると思う。(写真は内田守氏)